

次年の米づくりは始まっています！

◎稲わら腐熟でワキにくい圃場を作る！

◎気象変動に強いイネづくりに向けて土づくりを！

1 秋から始める異常還元（ワキ）対策！

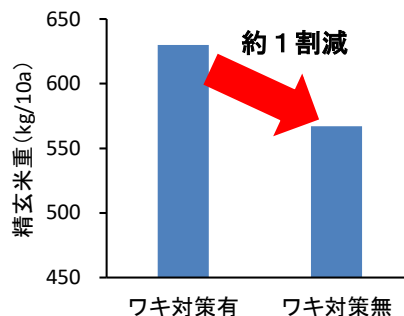
(1) ワキ対策を実施し初期生育を促進、収量確保！

ワキが強まると根の生育が抑制され、初期生育が遅れ、粒数不足等により収量ダウンにつながります。

ワキは、圃場にすき込んだ稲わらなどが、入水後、急激に分解されることで起こります。秋から春の期間に稲わら腐熟を進めておくことで、ワキの素となる稲わらの残存量が少なくなるため、ワキを抑えることができます。



ワキ対策（秋浅耕）
の有無による比較
6月10日の根の生育（写真）
収量（右図）
（R3 鶴岡市長沼 普及課実証圃）



(2) 稲わら腐熟促進の方法～あなたはどちらを選びますか？～

稲わら腐熟の方法は、「秋の浅耕」と「石灰窒素の散布」の2種類があり、効果はほぼ同等です。下表を参考にして、圃場条件や経営状況により自分に合った方法を選びましょう。

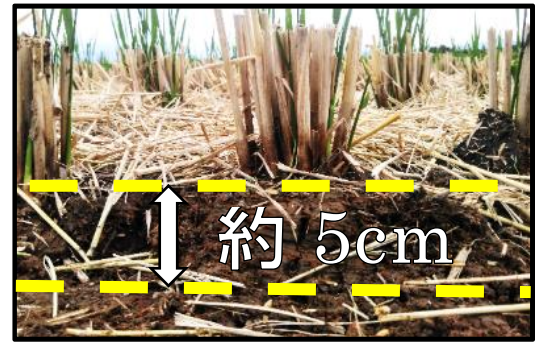
表 秋に行うワキ対策の方法

| | 秋の浅耕 | 石灰窒素の散布 |
|------------|--------------------------------|--|
| 実施時期 | 収穫後なるべく早く | （遅くとも10月下旬まで） |
| 実施方法 | 深さ5cm程度で浅く耕起 | つや姫で現物10kg/10a その他品種で現物20kg/10a を目安に動力散布機で散布する |
| コスト | 低い | 高い |
| 実施可能な圃場条件 | 実施時に圃場が一定程度乾いている | 玄米粗タンパク質含有率が毎年高い圃場や 全量基肥栽培では施用しない |
| リスク 注意点 | 排水不良圃場では、春先の作業に 支障をきたす場合がある | 玄米粗タンパク質含有率がやや高まる場合 がある 生育診断に基づいた穂肥を実施する |

(3)ここを押さえたらカンペキ！ 稲わら腐熟のポイント！

秋の浅耕を行う場合のポイント

- 秋は浅く(約5cm)、春は深く(約15cm)起します。浅く耕起することで、次の効果が得られます。
 - ・上層ほど地温が高いため、稲わらの分解が進む
 - ・春の耕起の支障とならない
- 排水不良等で圃場が乾きにくい場合は次のいずれかで対応しましょう。
 - ・水口や圃場入口等乾きにくい部分以外に実施
 - ・サブソイラー等で透水性を改善した後に実施



石灰窒素散布を行う場合のポイント

- 次のような圃場で「つや姫」を栽培する場合、石灰窒素の使用を見送みましょう。
 - ・地力が高い圃場
 - ・毎年タンパク質含有率が7.0% (乾物) 以上となる圃場
 - ・全量基肥施肥を行っている圃場

写真2 秋の浅耕後の様子
上: 未実施部分との境界
下: 稲わらが土壌と混和されている

2 土づくりで品質・食味・収量の向上・安定化を！

堆肥や土づくり資材の施用することで、登熟期までの養分・水分が保持され、品質・食味・収量が向上します。

土づくりの効果は、冷害年、高温・少照年などの厳しい気象の年次に特に大きく現れることから、気象の年次変動が大きい近年の稲作では特に重要です。来年の作付けに向けて気象変動に耐えられる圃場を準備しましょう。

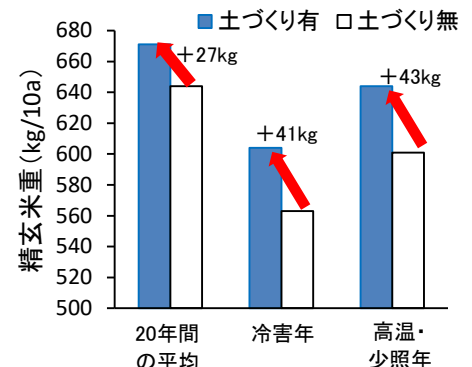


図2 土づくりの有無による収量の比較
※土づくり: ようりん・ケイカルの連用
(農業総合研究センター H30年成果情報)

堆肥施用の効果

土壌の養分供給能を高める
土壌を柔らかくし、保水力を高める



登熟が高まり、収量・品質が向上
白未熟粒・胴割粒の発生を防止

ケイ酸施用の効果

受光体勢がよくなり、光合成が促進され、乾物生産が向上する
(日照不足の年次ほど効果大きい)



収量・品質・食味の向上・安定化

<秋季農作業事故防止運動強化期間 9/1~10/31>

★見直そう！農業機械作業の安全対策★

収穫作業時に機械トラブルが発生したら、直ちに、必ずエンジンを停止して対応！
STOP農作業事故！